



Salamander
in
the circle

第二章
破滅の襲来

峯村 明

Salamander in the circle

登場人物

ダーヴェ・・・・・・・・・・ ネウトラ評議会・学術調査団の団長
ヒューダー・・・・・・・・・・ 〃 団員
ヤスウ・・・・・・・・・・ 〃 団員
レル・・・・・・・・・・ エウメロス王国・王室付き近衛隊長
ソルド・・・・・・・・・・ ケストル王国・警備隊長
ウルリク・・・・・・・・・・ ケストル王国・第三王子

目次

破滅の襲来

20.

21.

22.

23.

24.

25.

26.

27.

28.

29.

30.

31.

32.

33.

34.

35.

36.

37.

38.

奥付

破滅の襲来

20.

なにかに心惹かれるのに、理由がいる？

澄んだ水

その色、匂い、味

探せば見つかるかもしれないけど

別に探そうとは思わない

ぼくはただ、そこに居たくて、そこに居た

男のだみ声は気に入らなかったけれど

あの男がぼくを見つけてくれたおかげで

彼女に出会えた

彼女のなにに心惹かれたのか

探せば見つかるかもしれない

でも

別に探そうとは思わない

ただ、彼女といっしょにいと、心地よかった

心地よかった

心地よかった

もう

ぼくに必要なのは水ではなくて

彼女だ

21.

イモリの右前足が乗っていたのは、ずっと東にある大陸の一か所だった。この大陸には主に大きな王国がふたつある。大陸の西、比較的乾燥した地域にケストル王国、大陸のほぼ中央に、東北から南西に連なる長大な山脈、その東、湖沼地帯周辺にエウメロス王国。

ケストル王国の西の端、大山脈のふもとのあたり。ヤスウがしぶしぶそのあたりをマークするのを待って、イモリは外を眺めに窓へ行ってしまった。

(なんだってイモリの言いなりにならんきゃならねえんだ！)

「ヤスウ」イモリと並んで外を見ていたヒューダーが振り向く。「では聞くが、ダーヴェの行く先に、ほかに手がかりはあるのか？」

「……ねえよ」

「唯一の手がかりなのだ。探してみない手はなかりう」

「そりゃそうだけどよお」

ダーヴェの信号は届いている。ただどの方角から、どのくらいの距離からくるのか、わからないのが難点だった。

ヤスウは地球儀を見つめて考える。(長旅になりそうだ。偏西風に乗っても二日くらいかかるかな)そして——ふと思いついた。さらわれたマミヤという娘は、ヤスウと同族なのだ。聞けば十五、六だという。(俺より年が上なのかあ……)

「ヒューダー」

「む」

「さらわれた娘の特徴をまだ聞いてなかったぜ」

「特徴？ 例えば、どんな」

「あのさ、どーいう外見してんのか知ってなきや、見つけた時に、これだ、ってわかんねえじゃねえか。だから外見だよ外見」

「ああ。髪は黒、瞳も黒だ。肌は……ああ、お前と同じ色だ。背丈もお前と同じくらい。華奢な感じだが手足は長く、しっかりしている。全体の均整はとれている。顔立ちは——整っている」

「うーん……いや、その、かわいいとか、そうでもねえとか」

「……それは主観的なことがらだ……自分で確かめてみるしかあるまい」

「……………（こいつに聞いた俺が間違ってた。だいたい話が弾まねえもんなあ。ダーヴェ先生だったらおもしれえ話、山ほど聞かせてくれるんだけどなあ！ こいつときたら、頭と体格はいいが、それ以外はまるっきし、ぼくねんじん）」

しきりとそんなことを考えていたヤスウはふと、視線を感じた。イモリが振り返って、ヤスウを見ていたのだ。

22.

「それにしても、厄介な場所だ……」ヒューダーがつぶやく。ケストル、エウメロスが隣り合った場所とは。

ケストル王国は、最初は小規模な植民地だった。それが周辺の同じような植民地、原住民の土地を次々と併合し、今では大陸の西半分を版図としている。併合の理由はこうだ。「他国の脅威から自衛すべく、団結しようではないか」。団結したくない者に対しては実力行使である。

しかし、エウメロスが攻撃的な国かというと、「それは違うだろう」と多くの人が口

を揃える。この時代、国土を改造することは当たり前のようにおこなわれていたが、エウメロスは自然のままの土地を愛し、大切にしている、平和な国だった。ただ、隣国ケストルがことあるごとに挑発を繰り返すので、軍隊を持ってはいた。エウメロスの国民性からして、ひじょうに統制のとれた、兵士の質の高い、優れた軍隊で、隣国が挑発以上のことを仕掛けてこようとは思われなかった。

事件が起こったのは、まさにその時。 ヒューダーとヤスウとが、ダーヴェの行方を追って大山脈の西のふもとへと向かっている時だった。

巨人の群れがエウメロス王国を襲った。

身の丈5mに及ぶ巨人たちが、王国の西、3,000m級の峨峨たる山々の彼方からやってきた。彼らは手に手に原始的な棍棒、植物のつるをより合わせた長大なムチ、二個の重い丸石を動物の皮製の紐でつないで投擲する道具を持ち、エウメロスの市街地を襲った。

降ってわいた災害以外の何物でもなかった。大勢の市民が死傷、多数の建物は瓦解、町は瞬く間に廃墟と化した。美しく整備された街道は巨人たちの通り道となり、次の町へ、さらに次の町へ、そして王都へと、彼らをいざなった。

人々はなすすべもなく、恐怖と混乱のなかを絶叫をあげて逃げ惑うだけだ。それはとても文明社会とは思われない有様だった。そんななか、人々を戸惑わせる知らせがあった。隣のケストル王国が、「災害のお見舞いを申し上げる」という意味の声明を送ってよこしたのだった。そして、「未曾有の災害であるので、弊国滞在中の貴国王女殿下を保護させていただく」、と。

エウメロス王国の王女ヘルガが、ケストルを訪問している最中だったのである。

23.

近衛隊長が金髪をかきむしって懊悩するのを部下たちは黙って見ているしかなかった。エウメロス国王は病床にあり、世継ぎのカール王子はまだ十三歳。政治は王の弟が摂政として執り行い、王子より十歳年上の姉王女が外務を担当していた。

此度のケストル訪問は王家の代表というより、外交の仕事だったので、外務省の士官が王女に付き添った。王室に仕える近衛隊の圏外だったのだ。

『災害』が刻一刻、すぐそこまで迫っている。レル隊長は髪をかきむしりながら王一族を避難させる段取りに忙殺されていた。

巨人族は残忍極まりなく、巨体にもかかわらずといおうか、巨体ゆえか、おそろしい足の速さで宙を飛ぶように駆ける。そして、人、家畜、愛玩動物、目に入る生き物は端から打ちのめし……執拗に打ちのめし、植栽を引き抜き、建物は突き崩す。燃えるものには火をつける。火を恐れないのだ。彼らが通り過ぎたあとに残るのは残骸だけだ。いや。なにも残らない。

その様子が少しずつ、漏れ伝わっていくと、人々は恐怖のあまり逃げる気力さえなくす。意志をもった嵐が来る。これはもはやこの世の終わりだ

醜悪に歪んだ容貌、聞くに堪えない咆哮からとても知性があるとは思えないのだが、かれらは明らかに王都を目指していた。

「隊長！！ レル隊長！！」

近衛兵のひとりが隊長の名を連呼しながら廊下を走ってくる。優雅な制服はすっかり着崩れてしまっている。

「隊長！ 隊長、大変です！！ たった今、中庭の王宮に、いや、王宮の中庭に——！！」

壁に貼った地図を睨んだまま、レルはつぶやいた。「もう来たのか——早すぎる——せめていましばらく——国王陛下を説得する時間がある——」

「隊長！！ 中庭に航空機が着陸！！」

「——航空機？ 王弟殿下が戻って来られたのか！？」

「違います！ そうじゃありません！ 王弟殿下は真っ先に避難してそれっきりです！ 着陸したのはネウトラ評議会です！！」

レル隊長はいっしゅんあ然としたが、ものも言わずに対策本部を飛び出した。

24.

赤銅色の肌をした若い男が航空機から降りてきて、左腕の腕輪を掲げ、ヒューダーという名を名乗った。顔つきといい、体格といい、エウメロス近衛隊にも、正規軍にもあまりいないような精悍さだ。ただ者ではない。レルのいつときの高揚はみるみる後退し、かわりに警戒心が頭をもたげた。

だいたい、なぜこのタイミングでネウトラ評議会が来る？ 度重なるケストルの迷惑な挑発をなんとかしてくれと訴えても腰をあげたためしがないではないか。

近衛隊長の猜疑の目ももつともだ、とヒューダーは思った。だいたい、昨今のネウトラ評議会の国際的別名は『どっちつかず』だった。

「ケストル王国上空を航行中に、貴国の緊急事態信号を受信した。それで、ここへ来た」

「で……ネウトラ評議会どの、ご要件は？ ご存じの通り、今少々立て込んでいる」

ヒューダーはうなずいた。「貴殿の仕事の邪魔をするつもりはない。仕事を続けられよ。それから少しばかり聞いてもらいたいことがある」

対策本部へ戻る道すがら、ヒューダーは説明した。「我々は、上級賢者ダーヴェを団長とする巨人族調査団だ」

レルは思わず足を止めた。「巨人族調査団！？」

「定期的な学術調査は行われてきたが今回のは違った。巨人族が居住地から消えてしまったという報告がいくつかあり、我々が調査に乗り出した。ある国で……そこは評議会加盟国だが国名を公表していない。それゆえ、名は言えない……収穫はなかったにもかかわらず、現地人とダーヴェ団長が行方不明になった。地図を見せてもらえないか」

レルは先刻まで睨んでいたのは別の、もっと大きな区域を示す地図の前に案内した。もはやためらってはいなかった。

「ここだ」ヒューダーは大陸を二分する大山脈の西のふもとを指さす。イモリの右前足が乗っていたところだ。

「我々はここを目指して航行中だった。ダーヴェ団長がこの地点から我々を呼んでいた。そして手前の、このあたりで、さっきも言ったが貴国の緊急事態信号を受信した」

「我々というと？ 航空機には貴殿しか乗っていなかったが？」

「ああ、もうひとり、魔法使いが乗っていた。ダーヴェと合流するため、現地で単身、航空機から降下した」

「なるほど——」

「納得いただけただろうか？」

「うむ——すると——今、我が国を襲っている巨人族は——」

「彼らがどこから来たか、わかるか？」

「西から来たのはたしかだ。西には——大山脈とケストル王国との国境がある。しかしあまりに情報が無さすぎる——！」

25.

「何事が起ころうと王が城を離れるわけにはいかぬ」

そう言って病床でがんばっていた王だったが、評議会の腕輪を持つ男がやってきて、「お気持ちは察するにあまりある。しかし前代未聞の事態ゆえ」と低い声で短く諭されると、ついに首肯した。

説得に苦勞していたレルは内心、（この男、やはりただ者ではないかもしれん）と思ったが、まあ、王が若かった時代に評議会にはまだ権威があったというだけのことだった。そのことに気づいたヒューダーは必要とあればただの腕輪にものを言わせるのである。

緊急事態信号を聞きつけた近隣の艦船が次々と到着し、着の身着のままの避難民を満載して次々と飛び立っていく。腕輪の男が病床の王を説得し、脱出させたという話があつという間にひろがり、人々は白色のエウメロス人の間に文字通り異彩を放つ男の姿を見ると、パニックがみるみる収まるのだった。

レルとしては少々ふくぎつな気分ではあつたが、そんなことを言っているばあいではない。人々の避難を軌道に乗せて、いっとき休憩をとろうとその辺の椅子に腰をおろす。

テーブルに湯気のたつ飲み物が置かれるのを見ると、またも心がざわつく。ヒューダーは有能でありがたいのだが、こんな場面でも他人に気をつかう余裕があるのかと、

つい思ってしまうのだ。レルの出身は由緒のある家柄、父も叔父も国防軍の要職に就いていて、彼自身も若くして当然のように近衛隊長に就任した。その自尊心は決して低くはない。よそからふらっとやってきた男に、自分のものを横取りされたような気分になってしまうのだ。彼自身、そんな気持ちになるのはいやだという自覚はある。自尊心ゆえに。心持ちを中立（ネウトラ）に保つよう、そっと頭を振る。

「貴公は——」

「レルだ。そう呼んでくれ」

「では……レル、君は巨人族について知っているか」

「ああ……人類に近い、古い種族だ、ということくらいは」

「そう、古い種族だ。凶暴で、残忍な性格で、同じ族の中での殺し合いは日常茶飯事だったという。そんなことをしていれば数が減りそうなものだが、そうはならなかった。彼らは多産だったのだ。減ってもすぐに増える。人間に近い姿をしているが……動物的だった。人間に近いといえば、彼らの間で通じる言葉もあったし、道具を作り、操った。野生の動物を手なづけて使役することもした。石壁に絵を描くことさえできた。彼らは我々の祖先をひんぱんに襲った。……食糧にするためだ。祖先たちは彼らを嫌悪し、恐怖した。そしてついに、全人類が手を組んで巨人族に対処しようということになった。祖先たちは話し合いを重ねた末に何をしたか。

強力な薬剤を使ったのだ。巨人族を不妊にするものだ。さらに、強力な爆薬を使ってずっと北の不毛な地帯へと、追いやった。『駆除』という言葉が使われた。巨人族の個体数は減り、人類との関りはなくなった。駆除は成功した。三万年前にほぼ絶滅したことになる。が——別の問題が起こった」

26.

「不妊とは……生物としての活力がなくなるということだ。身長5mの生物の活力を奪

う薬剤というものがどれほど強力なものか、どこに、どんな影響を及ぼすか……想像できるか？ 生態系が狂いだした。そして大量の爆薬によって繰り返された大爆発が火山活動と地震を誘発し、大気の流れが変わった。気温が急激に下がり、北の極地付近は凍りはじめ……融けない。どれほど時間が過ぎても融ける時が来ない。それは今も続いている」

「信じられない——それは——本当のことなのか」

「人類に対する脅威に立ち向かおうと世界中から代表者が集まった、という話をしたな。その代表者らが結成したのがネウトラ評議会なのだ」

「貴公——」

「ヒューダーでいい」

「ヒューダー、そんな話を聞かせていいのか？」

「評議会設立など古すぎて、どんないきさつがあったのかなど誰も知りたがらんし、秘密でもなんでもない。しかし君は王国に対して責任ある立場にあるのでは？ ならば、なぜ今、こんなことが起こっているのか、知る必要がある」

「あなたは——『剣を持つ者』という名だが、その……」

「名前とかけ離れている？」

「ええ……まあ……」

「——この大陸の南に地橋があり、もっと南の大陸に繋がっている。その大陸を赤道を超えて南下し、最南端までいくと、海からの寒風にさらされた地の果てのような土地がある。オレの生まれ故郷だ。オレは辺境警備隊の砦で生まれた。ある日、砦は襲撃され、今日のように緊急事態信号が発せられた。救助隊が駆け付けた時には……襲撃者は姿をくらまし、生存者はオレだけだった」

「その襲撃者というのは——」

「——ヒューダーという名は本名らしい。親はそう育てたくてつけたのだろう。だが——がれきの中からオレを見つけてくれたダーヴェについて歩いているうちに——知らなければならないと思った。賢者の資質も魔法使いの資質もない、己の身しか持たない

オレが、腕力や武器でとうていかなわないものに対峙した時にどうしたらいいのか。知らなければならぬと」

彼はつぶやいた。『襲撃者』を生みだした、人の智と愚かさを……知らなければならぬのだ。

27.

「巨人族がどこから我が国に侵入してきたのか。西から、としか言えないのだが、あなたは、これから調査団の仲間と合流するのだろうか？」というレルの問いにヒューダーはうなずく。「同行させてくれないか。ボクを」

「合流地点はケストル王国内だぞ」

「承知の上だ。ボクは、巨人族の後ろにケストルがいる、そう思っている」

「……ずいぶんはっきり言う」

「実は、王女殿下がケストル国内で足止めされているんだ。王族のケストル訪問と巨人族の侵攻。なにもないと思うか？」

遠い地鳴りに王宮が震えている。

「隊長！」部屋の入口から兵士が叫ぶ。「物見の塔から連絡。巨人族の主力はわき目もふらず城を目指しています。恐ろしい速さです！ 軍が城を守りますが、中庭まで突破されたら航空機が飛べなくなります！ だから！ お早く！！」口から唾が飛んでいった。

レルはきっと面をあげて叫んだ。イメージの中で、軍の組織図と命令系統図とを真っ二つに引き裂きながら。

「近衛隊長が国防軍に、いや、全兵士に命令する！ 防衛は不可能だ！ 全員即刻退却

せよ！！ 命令だ！！ 退却一っ！！」

28.

「見ろ、あれを」

「ああ——」

城の上空を旋回しつつ、醜怪な巨人族が誇らしげに手にした得物を振りかざし、口々に勝利の雄たけびをあげるのを聞く。

「城は破壊しないのだな」

「占拠が目的だったということか」

巨人族の目的はエウメロス城の占拠だったのだ。レルの胸中をいくつもの顔が通り過ぎ、思いが渦を巻く。真っ先に避難していった王弟、ケストルに『保護されて』いるヘルガ王女。これだけのことが起こったからには、どこかで予兆があったのだろうか。自分はそれを見逃していたのか。カール王子は避難されたのだったか……王女はご無事か……まさか、王の病気は……部下たちは……思いは千々に乱れ、なにも焦点を結ばない。彼は金髪をかきむしり、己の無力を呪った。そしてふと、目の端っこに。

「これは——なに——？」

地球儀の上に白く細長いものが乗っかっている。

「こいつ！ まだここにいたのか！」ヒューダーが指でつまんで持ち上げようとするが、剥がれない。「しまった、貼りついてる」

「ああイモリなのか、これ。脱水症状起こしてるね。そうだ、水。水はある？」

「飲料水なら、後ろの倉庫に」

倉庫を覗いたレルは、飲料水といっしょに、丸い平たい金属製のプレートをみつけてきた。たぶん食器だ。地球儀を濡らさないよう、布に水を含ませ、干からびかけているイモリに少しずつ、かけてやる。やがて——しっぽがぴくりと動き、うっすらと目が開

くと、レルはほっとして微笑んだ。すると、とても——幼く見えた。もしかしたらまだ十代の少年なのかもしれないと、ヒューダーは思った。

「おまえ……目が赤いんだね。体は真っ白だし、なんだか、ふしぎな感じがする」

「たしかにふしぎなやつだ。その右の前足が乗っているあたりをみてみろ。大山脈の西のふもとだ」

「……………」レルは眉間に軽くしわをよせ、イモリの右の前足が乗っているあたりを見つめ、つぶやいた。「そのあたりに、たしか——」

「そこに何かあるのか!？」

「何年前か前、まだ国王陛下がお元気だったころ、ケストル王室から招待状が届いた。新築の離宮への招待だった。なにかと挑発行為の多いケストルが？ 疑問視する向きもあったが、陛下は、隣国からのせっかくの誘いだからと、招待に応じられたのだ。ボクは随行員の一人としてお供した——」

「ケストル王家の離宮があるというのか!？ けっこうな山の中だぞ」

「こんな山の中になって、ボクもそう思ったよ！ そうだ、そのあたりに離宮がある！」

「イモリはずっとそこにこだわっているのだ。おそらくそこにダーヴェとマミヤがいる」

「マミヤって？」

「巨人族居住地を調査中にさらわれた、現地の娘だ。ダーヴェはその娘を追って行ったのだ」

29.

「ひとつ、話しておきたいことがある」、着陸の準備をしながらヒューダーは言った。レルはエウメロスの近衛隊服はまずかろうということで、調査隊の予備の制服に着替え

ている。

「国土を蹂躪された君には、巨人族はどれも同じに見えるかもしれん。だが個体差はある。マミヤたちは巨人族と友人として付き合っていた。信じられんかもしれんが、互いに受け入れあう関係だったのだ。そして、そのイモリはマミヤを追ってここまで来てしまった。水を離れれば生きていられないことくらい、わかっているだろうに。おそらくそいつは、マミヤに惹かれているのだろう。どうかそのことを……頭の片隅にでも、置いておいてほしい」

レルは丸いトレーに浅く水を張り、イモリを地球儀から離してそっと入れてやった。イモリはおとなしく、されるにまかせていた。水の中で気持ちよさそうに体を伸ばしている。

「ボクには母がない。ボクがほんの子供のころに、病気で……。だから、国王陛下が不治の病に倒れられた時のお子様方の気持ちは少しは理解できたつもりだ。ボクはその時、軍人としてではなく、もっと別の……癒す者、として王家に仕えたいと思った。でも今は——王家のためにやれることをやるさ」

彼はイモリの背中を撫でてやりながら考えていた。（まさかとは思うが——王女殿下も離宮に——？ もしそうだとしたら、ここまでいざなってくれたキミに感謝しなきゃな）

ヒューダーの声が言った。「着地する」

ヒューダーは既に、山と山との入り組んだ谷あいには航空機の発着場を見つけていた。やはりというか、人の手が相当入っていた。着陸した航空機に向かって、わらわらと人が集まってくる。軍服の大男が誰何する。「何者か！」

「ネウトラ評議会の学術調査団だ。団員がはぐれてしまったので、探している」

先に降下した魔法使いのヤスウがどうなっているかわからないから、とりあえず、本当のことを言うておくしかない。

大男は『学術』という言葉にびっくりと眉をあげ、目の動きでヒューダーの全身をくまなく見、「身分証明は！」と、問う。質問というより尋問である。

ヒューダーは腕輪を示した。それから、「こっちは見習いで、正式の証明を持つ身分ではないが、オレが保証人だ」

レルは内心、むっとしたが、文句を言っている場合でもない。

「そっちの見習い！ それは何だ！」

『隊長』と呼ばれるのと『見習い』と呼ばれるのとでは、気分的にずいぶん違うものだと思いますながら、『見習い』に徹することにするレルである。

「イモリですよ、途中で見つけたんです」銀色のトレーの中でゆらゆら泳いでいるモノを見れば誰だって「それは何だ？」というだろう。

「考えてみたら荷物になるんで、どこか水のあるところに放してやりたいんです」レルは澄んだまなざしで訴えた。ヒューダーは、オレがこういうマネをしたところで怪しまれるだけだろうとは思った。

軍服の大男は「こっちへ！」とだけ言って、歩き出した。どこへ連れていかれるにしろ、とにかく事態は動き出したようだ。

(あの一、ヒューダー。なんだか、これ、ちょっと大きくなったような気がするんだけど)

(水に入りっぱなしだと、ふやけるんじゃないのか?)

30.

「今朝がた、山道で行き倒れになっている男を発見した。評議会の腕輪をしていたため、評議会本部に問い合わせをさせてもらった。たしかに三名からなる調査団と連絡が途絶えているという。貴殿らがそうか？」

大男のごつい顔は表情乏しく、何を考えているやら見当もつかない。質問の本意もだ。行き倒れになっていたのはヤスウに間違いない。つまり、潜入するのではなく、つかまえてもらうという作戦。打合せ通りだった。しかし、大男の話からは、ダーヴェェがどうなっているかは不明だ。ゆえに、とりあえず、本当のことを言ってみる。

「はぐれたのは二名だ。すると一名は発見されたのだな」

大男が妙な顔つきになってヒューダーとレルを見比べている。数を数えることはできるらしい。「人数が減ると調査になにかと支障が出る。だから、ひとり現地調達したのだ」真顔でしれっと説明するヒューダーである。

「……で、なんの調査を？」

「山岳地帯に住む原住民の生態調査と彼らの文化がどの程度残されているかというテーマの予備調査だ。ちなみにオレは民族学者で言語学者。専門はドラヴィダ語とトラヴァトリ語……」

大男はちらりとヒューダーの全身を見回し、話は終わりだ、というふうに手を振った。何かを質問できる雰囲気でもない。友好的な雰囲気はまったくない。

ケストル人は感情の起伏が激しい、というよりは、ほとんど感情だけで生きているような人々である。国土の拡大と経済活動には熱心だが、国土の統治に成功しているとは言い難い。法律を作るセンスもなければ、守ろうとする意識も低い。周囲からみれば、大国だが何かが欠落している、厄介な国、だった。

山肌に隠された進入路が暗い口を開けている。最前までなかったものだ。

「——っ！」

とつぜん、レルがよろめいた。手にしていたトレーがぐらりと傾き、水が動いて下に転げ落ちてしまった。

「だいじょうぶか！？」

「あ、ああ……つまづいて……しまった！ イモリが——！」

岩を粗く掘った通路は削り跡もむきだしで、天井も壁も床も黒っぽく、薄暗い。天井はあまり高くなく、横幅は人が三人も並べばいっぱいになる。作業用通路とか点検路とか、そんな雰囲気だ。後方の扉が閉じ、別の扉が開く、その扉の部分にだけ照明が発し、進行方向を示す。見れば、通路は幾方向にも枝分かれしているようだった。

「あれ！？ どこ行っちゃったんだろ！？」

レルはあわてた。薄暗い中にイモリの姿を見失ってしまったのだ。

「ど、どうしよう！ いなくなっちゃった！」

先導する大男が扉を通り抜けながらどなってよこした。「なにをしている！ 早く来い！」

「で、でも！」

「しかたがない。かわいそうだが——我々がここで取り残されるわけにはいかん」

レルは唇をかんだ。暗闇に投げ出してしまったイモリに向かって言う。「すまない！

ごめんよ！ ボクがよろけたばかりに！ あとできっと助けにくるからね！」

彼の声は無念と懸念とをはらんで岩の通路に反響した。そして——暗くなった。

31.

黄泉路のような通路を行くうちに、小さな山をひとつ横断したらしい。いきなり外に出た。薄闇になれてしまってまぶしさのあまりめまいを覚える。まるで目くらました。（ああ……この光景……）手びさしで木漏れ日を避け、レルは考える。（見覚えがある。やはりここは『離宮』だ）

ヒューダーの視線に気づいて、目で、（そうだ）と告げる。

先刻の山に入る直前の殺風景さとまるで違う。山中に広がる芽吹いたばかりの針葉樹の林の美しさはとても言葉では言い表せない。母国の破滅的状况を見てきた彼には胸にささる美しさだ。

ヒューダーもまた違う感慨を味わう。彼の祖先の記憶には、ある鮮烈なイメージが存

在する。虚空へと、植物の芽が渦を巻いて伸びていく。芽吹き、葉を茂らせ、花を咲かせ、結実させる、植物の持つ力を、祖先は使うことができた。重量のあるものを動かし、移動させる。航空機でさえ、かつてはその力で飛ぶことができたという。虚空へ伸びる渦巻の先端はエネルギーの象徴なのだ。自然と人間は別々のものではないという証だった。しかし、それはもはや『記憶』にすぎない。胸に痛みを感じる。喪失の痛み。いつの時代にか、自然と人間は別々に分かれてしまったのだ。

ふたりが景色に目を瞠り、声もなくそれぞれの物思いに沈んでいるのを見て、大男は他愛もなく気分が高揚し、必要のないことを口走り、やってしまうのだった。「高貴な方々のご滞在中であられる。静粛にするよう」

広大な針葉樹の林は澄んだ日差しに光り輝いている。無骨な大男の先導がなければ素晴らしいところだな、とヒューダーがひそかに考えていると、それは現れた。

山中であるにもかかわらず、水路が縦横に流れ、大小の丘がうねる。いたるところに草花や灌木が植わっており、つぼみをつけている。いっせいに花開いたらさぞかし見事な眺めに違いない。が、見る者が見れば違和感を覚えずにいられないだろう。産地も開花時期も生長する土壌もそれぞれ異なる植物がひとところで息を詰めるように開花のタイミングを待っているのだから。

庭園に比べて建物自体はさほどの大きさではないものの、淡い董色の美しい石がふんだんに使われ、窓という窓、テラスというテラスから蔓性の植物があふれ、緑のあいだに宝石の飾りが煌めいていた。それは、可愛らしい、といっても差し支えなかったかもしれない。

レルは庭園が数年前の数倍もの広さになっていること、建物が植物と宝石によって別人のように変貌を遂げていることに首をひねっていた。前は周囲の針葉樹林との一体感があったのに、と。計画に変更があって大々的に造りかえた感じだ。

と、どこからともなく、ゆるい声が飛んできた。先頭にたって歩いていた軍服の大男がはっと立ち止まる。

「ソルド！ 警備の者がこのようなところで何をしているのだ。その者たちは？」

どこか気弱そうな面立ちの、痩せ気味の中年の男だった。ソルドと呼ばれた軍服の大男は直立不動の姿勢をとる。

「殿下！ は、えー、ネウトラ評議会の学術調査団の方々です」

殿下はふと表情を変えた。「評議会の？ すると、今朝がた、山中で倒れていたというお人の？」

「は。お仲間であらせられます！」

「これはこれは。失礼を申しした。お仲間はあちらの棟で休まれておられるはず。ソルド、ご案内いたせ」

評議会の面々だというふたりがソルドに連れられて管理棟へ向かうと、殿下はいそいそとした足取りで本館へと急ぐ。

32.

ヒューダーの顔をみると、ヤスウは演技でもなんでもなく、心底ほっとした表情をみせた。互いの無事を確かめ合い、再会を喜んでいるとソルドが部屋を出て行った。

「いやー、よく見つけてくれたぜ。ここにこんなもんがあるなんて知らなかったし、運び込まれたときはさすがに不安だったもん。まあ、穀物の粥しか食わせてくれねえが、待遇はわるかねえよ。ところで、そっちの人は？」

ヒューダーは細かく聞くなど目くばせした。「オレが航空機の操縦がへたなこと、おまえも知ってるだろ。どうしても助手が必要だったので同乗してもらった」

(……ふうん？)

「レルといいます。よろしく」

差し出された右手を見ながらヤスウは言う。

「ヤスウだよ。よろしくな。で？」

ヒューダーはほとんどわからないくらいに首を横に振った。レルはいっしゅん、手を無視されたのかと思ったが、少しの間をおいて強く握り返されて、はっとした。一見、頼りなさげな人相のヤスウの目には、憤りとも哀しみともいえない複雑な感情があった。今のなんでもないやりとりで事情がほぼ共有されたのだ。

「先生の方は？」

「それがさっぱりなんだ」

「信号は？」

「あるよ、相変わらず。だから、死んじゃあいねえんだ。……そういや……元ネタのイモリのやつはどうした？」

「それが……弱ってたので水に入れて、航空機からいっしょに降りたんだ。そのあと、うっかり落としてしまって……ボクのせいだ」

「うっかり落としたって……てめえ」

「よせ。ヤスウ。岩をくりぬいた通路の中だった。隙間があるようではなかったから、まだそこにいるはずだ。あとで探しに行こう」

「そ、そうだな」

33.

間もなく、ソルドが戻ってきた。彼ひとりではなく、数名の部下が三人分の簡単な食事を載せたワゴンを押してきた。「殿下からの心づくしである」ふんぞり返ったソルドの態度からすると、ありがたくいただけ、ということだ。とてもそんな気分ではなかったが、断る理由もなく、ここしばらくまともに食事をとっていないことに気づく。が、

食卓を囲んだところで話は弾まない。盗聴されているかもしれないからだ。

そのうち、ふと、レルが手をとめた。黙っているのが苦手なヤスウが口をもぐもぐさせながら「どしたんだい」と尋ねる。

「鳥が——鳴いてる——」そう言ってレルは立ち上がった。気になるらしい。食事を中断し、窓辺へ行って窓を押し開け、耳を傾けている。

「たしかに鳥の鳴き声だ」、とヒューダー。

「山んなかなんだ、鳥くらいいるだろ。それより、早いとこ、食っちまおうぜ」

「ああ——」

問題は山積している。たしかに食事や鳥どころではない状況だったが、考える時間は必要だった。

ヒューダーはずっと考えていた。エウメロスが発した緊急事態信号はいくつもの国や機関が受信しているはずだ。彼ら自身受けた信号を評議会本部へ転送している。世界各国がエウメロス王国がどこからともなく現れた巨人族の群れに蹂躪され、破壊されたさまを見る。しかし王城は占拠されただけでほぼ無傷。ということは、誰かが入城するからではないのか。おそらく、それはケストル人だ。しかし証拠がない。

ソルドがやってきて部下に食器を下げさせながら思いがけないことを言った。「王子殿下がお会いになられる」

34.

ケストル王国の支配者、国王はかなりの高齢だったが意気盛んな老人で、息子が三人いた。第一王子は生まれつき病弱で若くして病没、第二王子が軍を率いて暴れまわって

いたが先年、重傷を負って床についてしまい、そろそろ壮年を過ぎようという末っ子の第三王子が王位継承権者の一位に押し出された。しかし老王が頑張っているものだから跡を継げない。そうなると、欲も出てくれば不満もたまる王子だった。彼の名はウルリクという。

ウルリクの悩みは父親がいつまでも元気なことと、兄が戦争好きであることだった。根っから争いが好きな兄は、「王位には興味がない、継承の権利は弟に譲る」と言い、病床から軍を指図しているのである。そして、父はことあるごとに「ウルリクよ、おまえは三男だからと、こどものころから甘やかされすぎた。甘やかされて生きてきた者にはろくな者はおらん」、兄はことあるごとに「おまえのように心根のやわな者に戦争はできん。兄に任せておけ」そして付け足すのだった。「こどものころのようにな」。また、兄の一家は弟一家を家族ぐるみで見下していた。

このように、ウルリク王子はこどもの時分から自尊心を切り刻まれ、次代の王であるにもかかわらず、王家のなかでは浮いた存在だった。彼は（今に見ておれ）、そう思い続けた。

そしてある時気がついた。父の、長期に渡る、絶大な権力。ウルリクは考える。国土を増やすのだ。兄とは違う方法で。その暁に父が私を認めれば、私は兄以上になる。どうだ、この考えは！

（いいじゃない！）、ささやく者がいた。（素敵な考えじゃないの！ 兄上とは違う方法で！ いいところに目をつけたね。あなたは頭がいい！）

「なんと——。おまえは誰だ？」

ふふ、とそれは笑った。低く、含みのある声で。

（いつもすぐ横であなたを見ていた。あなたの悔しさ、寂しさ、怒り、不遇を、よく、知っている者だよ。あなたはもっと評価され、称賛されなければならない。あなたを不当に扱った者は、報いを受けなければならない。私があなたを守ろう。私があなたを導こう、ウルリク）

こうしてウルリク王子は『導く者』と手を組んだのである。

兄とは違う方法で国土を増やす。その案を実現するために『導く者』が示した計画は、ウルリクが想像したこともないものだった。

「一体、こんなことが成功するのか——」

呆然とつぶやくウルリクに『導く者』は「あなたが成功する、と信じるなら」と答える。信じなければ失敗に終わるというのだ。「ものごとはそれがすべてなのだよ、ウルリク。信じるのだ、あなた自身を。そして……私を」

「信じるとも。己のために。おまえのために。そして、ああ、成功の暁には——おまえは何を望む？」

「私の望み、だって？」

「そう、報酬だ」

「なにも」

「なにも？」

「そう、なにも。なにも望まない」

これほどの無欲があるものだろうか。ウルリクは慄く。感動するべきか。それとも、恐怖するべきなのか。

「……ただ……」

「ただ、？」

「あなたの気持ちは受け取ろう」

35.

「お役目、ご苦労に存じる」ウルリク王子は威厳に乏しく、しかし態度も言葉もきわめ

て礼儀正しい。むしろどことなく嫌味に感じてしまうヒューダーである。

ネウトラ評議会の人間は、調査官とはいえ国家元首と対等の立場であるという、隠された権限を持っている。すべての王国の根幹にあり、どの王国よりも古い歴史を持っているゆえに。ヤスウは知識としては知っていたが、（あんまりやりてえもんじゃねえな）というのが正直なところで、この場合、押し出しのいいヒューダーに任せておくのが一番だった。たいていの人間はヒューダーの芸術作品のような外見に気おされてしまうのである。

「このような山の中ゆえ、行き届かないところはお許しを願い、精一杯のおもてなしをさせていただきます所存。なにとぞ、ごゆるりとお滞在を」

相手は国家元首の後継者だが、それでも軽くお辞儀までされて、ヒューダーの内部で小さく警報がなり出した。情報収集のためにはしばらく滞在するのが得策かもしれない。しかし彼らにはそうする口実がなかったから、ウルリクの申し出は渡りに船ではあった。けれども。なにかひっかかるのだ。

「急いで出立されぬ方がよいでしょう。できるかぎり、情報を収集されてから、ですな」

「情報を——収集——？」ヒューダーはわずかに眉をひそめた。（——何を言ってるんだ、この男は）

「はあ——さて——もしや、あの、ご存じない！？」

「何のことです、何を言っておられる！？」

「今朝がた、ネウトラ評議会の本部が襲撃されたことですよ！ 恐るべき巨人の群れが夜陰に紛れていきなり—— ええっ?? ご存じだとばかり——！！」

36.

ヒューダーは混乱する頭に向かって、しっかりしろ、と叱りつける。この地で今朝がたということは、もっと東にある評議会本部の地は真夜中だったはず。そんな時間に襲撃――

あまりのことに膝が折れそうだ。「それで被害の状況は！？ そうだ、たしか、この男を山道で発見した後、評議会本部に問い合わせたとソルドが言っていた。その時は本部と連絡がとれていたんだな！？」

ウルリクが鷹揚に顎をふってソルドに返答を求めると、「は、その通りであります」ヒューダーはいらいらと質問を重ねる。「その時何か……変わったことは！？」「さあ。いっこうに。評議会とひんぱんにやりとりがあるわけではありません。ですから、どういったことが平常で、どういったことが変わったことなのかは」わかりかねます、とソルドはセリフを結ぶ。

ヤスウの目はヒューダーのいらいらとソルドののりくらりの間を行ったり来たりする。あまりに思いがけなさ過ぎて、頭が働かない。ふだんは涼しい顔で落ち着き払っているヒューダーまでもが自制が利かなくなっているようにみえた。

「調査官どの、調査官どの、とにかく気をお鎮められよ。お国の被害状況はさすがに当方にはわかりかねること。なにぶん、距離もあることであるし」

黙っていることに耐えきれなくなったレルが口を切ろうと、こぶしを握りしめて一步踏み出した時だった。

部屋の扉が外から叩かれた。

ソルドの部下が対応に出る。部下では対応しきれない事柄らしく、ソルドが呼ばれ、彼らはいったん部屋を出る。なにやら不穏な雰囲気伝わってくる。ウルリクには、「評議会本部襲撃について情報がまったくない。どうしようもありません。どうか落ち着いて」と諭される始末。

そうこうするうち、戻ってきたソルドが戸口から怖れ敬いつつウルリク王子を呼ぶ。ソルドがなにやら説明しているようだが、彼の意識もウルリクの意識もヒューダーたちに向けられているのがわかる。奇妙な状況だった。やがてウルリクはヒューダーたちをちらりと見やり、会釈もなく部屋を出て行ってしまった。入れ替わるように無表情のソルドが歩み寄ってくる。

「貴殿らに虚偽の申請があったことが判明した。同道願いたい」

「——虚偽とは？ どういうことだ、説明してくれ！」

ソルドは改まって向き直り、ヒューダーとレルを指さした。「その方ら、もうひとりを連れ込み、進入通路に隠したであろう」

37.

それは少年だった。短い髪はどうやら白で、目は充血しているのか赤っぽい。小柄で痩せている。年齢は……十二、三くらい。まだ子供の部類。ヒューダーもレルも、ヤスウも、そろって首を横に振る。知らない顔。見たこともない。このこどもを施設内に連

れ込んだことを隠していただろうと、ソルドはいうのだ。

「知らぬわけがない。この施設は王族の方々が利用されるゆえ、嚴重に警備されている。どの通路からいつ誰が入り、いつどこから出たか、細かく記録されているのだ。これは」と少年を指さす。「今日あんたらが入った、あんたらしか使ってない3号通路に隠れていた。3号通路に異物反応があったんで駆けつけてみたらこれがいたのだ。あんたらとっしよに入ったとしか考えられん」

いつの間にか『あんたら』よばわりである。ソルドは胸を張って詰め寄る。「どういうことなのか、説明してもらおう」

「知らないものは知らない。本人はなんと言ってるんだ？」

待ってました、という顔のソルド。「あんたらとっしよに来たと」

ヒューダーは少年から目をそらしてかぶりを振った。「何度でもいう。知らないものは知らない」

「ええい。まだ白を切る気か」ソルドの言葉使いは相手によって露骨に変わるが、今度は時代劇じみてきた。「このこども本人があんたらとっしよに来たと言っているからには、あんたらに虚偽申請の疑いがあるのは明白。よって、施設から出ることは相ならん」

「なっ！！ そんなことってあるか！！」ヤスウがたまらずに叫ぶ。が、これはひょっとして渡りに船その2、というやつかもしれないとヒューダーは考える。ソルド側は我々を足止めしたいか、それとも、外へ出たくないのだ。

「そのこどもと話したい。直に」

「何言ってるんだ、ヒューダー！」

「そうとも、ヒューダー！ こどもと話してどうなる！」

「仲間割れか？」ソルドはおもしろがっている。

「よく考えろ！ よく考えろ、おまえたち！ 我々は学術調査団なんだぞ！」

「そのどこがなんだってんだ！ あんたどうかしてるぜ！」

「ボクはもう降りる！ キミたちとは付き合ってもらえないよ！」

「ちょっと落ち着け」

「それはこっちのセリフだよ！ 落ち着き過ぎてこのありさまじゃないか！」

「おい、だいたいおめえはなんなんだ？ ちゃっかりメンバーにおさまりやがって！

俺がこの団に入るのにどんだけ苦労したか知らねえだろ！ 試験に七回も落ちてんだ！

どうだまいったか！！」

「そりゃーごくろーさん！ ボクなんか一発合格どころかスカウトされたクチさ！ うらやましいかい？」

「なんだとーこのやろー」

「その調子だ、もっとやれ！ 手を使っていいぞ！ オレが許可する！」

どさくさに紛れてあおるヒューダーである。

「なんの許可だよ！ 偉そうに！ だいたい前から偉そうなんだ！」

「ああもう！ やってられない！ ねえソルドさん、ボクはこの人たちとは無関係なんです。もうたくさんだ！ こんりんざい顔もみたくない！ 頼みますから部屋を分けてください！ それと食事も別々で！」

38.

「やるなあ、あいつ」ヤスウは感心している。「さりげなく別行動に移行」

(ああ。うまく話をあわせてくれたな)

(ところで何者なん？)

(隣国の王室付き近衛隊の長)

(そんな人がなんでまた)

(王族の誰だかがこっちで足止めされているらしい)

(ホントかよ。そりゃまた厄介な話しだなあ)

(元の仕事に復帰できればいいが)

(まったく)

(例のこどもも別室に連れていかれた)

(わけわかんねえぜ。あんなこどもを使ってケストルのやつら、何がしてえんだろう)

(それなんだが——あのこども——)

(え。心当たりがあるのか?)

(そうじゃない。そんなものはないが——)

先祖の記憶をたどっても、心当たりはない。そんなものはないが——。

それは過去にではなく、未来にある記憶かもしれない。ヒューダーは己のそんな考えに戦慄を覚えるのだった。

第二章 『破滅の襲来』

第三章へ続く

奥付

Salamander in the circle

第二章 破滅の襲来

2021年10月10日 初版発行

著者 峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材 「月とサカナ」 <http://snao.sakura.ne.jp/>

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社
